

[0020]九州大学生体防御医学研究所年報 : 2005年

<https://doi.org/10.15017/6244>

出版情報 : 九州大学生体防御医学研究所年報. 20, 2006-07. 九州大学生体防御医学研究所
バージョン :
権利関係 :



平成17年度(2005/2006年)の研究活動の概況

生体防御医学研究所・所長

吉開泰信

(よしかいやすのぶ)

生体防御医学研究所では、生体の恒常性を維持している「生体防御」研究というユニークな研究課題のもとに生命現象の本質に迫る基礎研究を展開すると共に、生体防御機構の破綻による難治性疾患の発生機序の解明と診断、治療法の確立を目指した研究を展開し国際的にも高い評価を受けて参りました。本研究所の前身は1931年に設置されました温泉治療学研究所と1955年設置の医学部附属癌研究施設であります。それらが統合されて、1982年に生体防御医学研究所が発足しました。その設立の経緯から、基礎研究の6部門は福岡市の九州大学病院地区に、臨床研究の5部門と研究所附属病院は別府地区において活動してきました。2001年4月、ポストゲノム科学にもとづく生命科学をさらに一層、強力に推進すべく、本研究所では大幅な改組を行い、3大部門(12分野)、2附属研究センター(8分野)、1附属病院の構成にいたしました。すなわち、従来の11部門を3つの大部門(各部門に4分野)に再編成し、さらに難治性感染症の克服のための基礎研究を推進すべく「感染防御研究センター」(6分野)を新設し、機能ゲノム科学研究の推進を目的として学内共同利用研究施設である「遺伝情報実験施設」を本研究所に統合して「遺伝情報実験センター」(2分野)を新たに設置しました。また、NMR、X線解析装置を設置して構造生物学分野を中心に我が国における蛋白構造解析の拠点のひとつを目指しております。さらには情報生物学分野を設置して、ゲノム、蛋白情報解析の充実を図りました。感染防御研究センターに客員部門を2分野設置して幹細胞研究、ペプチド解析の充実をはかりました。所内の共同研究支援施設として、技術室、発生工学実験室を併設しています。臨床研究面では、遺伝子治療などの開発型先端的医療研究を強力に押し進めると同時に、一方ではQOLの向上と生体にやさしい治療を目指した「非侵襲性がん治療」の研究と実践を九州大学病院のゲノム診療科と別府先進利用センターで行っております。さらに人事面では、研究者の流動性と優れた一流の研究者の確保を目的として全教官に任期制を導入いたしました。技官、研究支援推進員を研究所所属として技術室と発生工学実験室の配属し、発生工学、遺伝子解析、蛋白解析などのための共通研究支援を行っています。本研究所は医学系大学院およびシステム生命大学院において大学院教育にも積極的に参画して多くの院生、ポストドクトラル・フェローを受け入れております。

国立大学法人九州大学がスタートして2年経過してその予算的な厳しさが現実的なものとなってきました。平成18年度の国立大学法人に対する予算、並びに国の方針が示されましたが、特に「5年間5%以上の人件費削減」は、平成16年度発足当時私どもが認識していた以上により厳しい削減で、特に研究を志向する附置研究所にとりましては、文字通り死活問題に繋がると危惧しております。これまで以上に研究所の存在意義を大学内外に発信していかななくてはなりません。質の高い基礎研究の成果の情報を発信し続けることはもちろんのこと、社会貢献・国際貢献に関する活動を社会に対して目に見える形で示すことが、ますます重要となってきます。これらの課題に適切に対応するために今後とも所員一同、より一層の努力を行う所存であります。何卒、生医研の今後の発展のために厳しい御批判、御鞭撻とともに御支援賜りますよう心よりお願い申し上げます。

平成18年6月1日